

## 僕と川崎さん

川崎さんに初めて会ったのは、僕がロンドンの生活に飽きて、日本に帰ってきた時だった。なぜ、ロンドンの生活に飽きたかというのは、ここではあまり話したくないので、くたくたに疲れた別れのごたごたと、なにもかもおしまいだという僕の気分が原因の病だった、とそくらしいしておく。なんてね、初めて小説を書いてみようと思ったので、ジャック・ケルアックの「オン・ザ・ロード」の出だしをマネしてみました。

「オン・ザ・ロード」は、主人公のサル・ジャック・ケルアックが、ディーン・モリアーティーことスピード狂のニール・キャサディに出会い、パワフルな中古車を取り回して、アメリカ中を駆け巡る小説です。

アメリカ文学史に残る名作「オン・ザ・ロード」ですが、僕には全然面白くないので、何を訴えようとしているのか、まったくわからないんですが、パラパラと読んだところから察すると、ジャック・ケルアックは、スピードばかりやって一睡もしないニック・キャサディに出会って、「こりゃ、ラッキーだ、こいつに運転させて、アメリカを旅したら、本当のアメリカがわかるんじゃないか。それを書けば、面白い小説になるんじゃないか」ということだと思うのですが、本当のアメリカ、何がじゃあ僕はムカつくだけなのです。

「オン・ザ・ロード」の旅は1947年の冬から始まる。このボケナス二人の、ほんの2年前に終わった戦争（しかもノルマンディやレイテ島などで激戦を繰り広げた）での同士に敬意を評することもなく旅に出る、という考えは、僕には頭がおかしいと思えないのです。

この頃の日本といえば、アメリカ人のせいだ焼野原ですよ。原爆はふたつも落とされ、広島市民34万人のうち14万人、長崎市民24万人のうち14万9000人が一瞬にして殺された。大量殺人以外の何ものでもないこの惨事を前にお前ら何がドライブだ。こん

な時に「俺は本当の日本を探すぞ」と旅に出た奴がいたか、いなかったでしょう。それを考えると、まっ、凄いいことかもしれません。

そして、この二人がとった行動は後には正しかったということがわかるわけです。朝鮮、ベトナム、イラク、アフガニスタンとアメリカの戦いは迷走をきわめていく。その中でこの二人がとった行動はビート（逃げる）ということだった。

マイケル・ジャクソンの「ビート・イット」をカラオケで歌っている時、ぶち嘸ませなんて、思ってた歌ったら、ダメですよ。あれはずらかれっ、て歌わないと。

巨大化する資本主義、それを拡大するために、どんどんと広がっていく戦争、きつとそれに誰もが巻き込まれてしまうだろう。だから、逃げるしかないんだと、彼らは予言した。そして、それは間違っていないかった。

オモロいのは、アメリカの端まで逃げていっても、また自分たちの故郷に戻っていく二人の底抜け加減、その向こうにはアジアが広がっているのに。謝りにこいよ。船に乗って。二人とも凄く船乗りには憧れたはずなのに、また同じ車に乗って、違うルートでお母ちゃんの家に戻っていくのです。そこでグダグダして、また旅に出るんです。何回も。

こんなクソ小説、何で読める。僕は何回も挫折してしまっています。

オチはニール・キャサディが落ちぶれたという話です。ジャック・ケルアックはこういう生活はいつまでもできないと、ニールと縁を切る。その象徴として、最後にニールに旅に誘われたのに、ジャックは別の友達と、ニールとよく観にいていたチャール・パーカーやレスター・ヤングのアンダーグラウンドなビー・バップじゃなく、前時代的なデューク・エリントンのビッグ・バンドをオペラ・ハウスに聴きに行くところで終わっています。ビートが嫌ってた、スクエアに成るってやつですか。

よくあるパターンなのでしょう。「オン・ザ・ロード」が最初なのかもしれませんが、なんか、そうとは思えない。

この手のオチは青春映画の傑作「ワンダラーズ」で子供の頃見ました。不良少年が町で当時の仲間を見つけ、声をかけようと、友達の後を追っていくと、友達はカフェに入っていく。そこでは若かりし頃のボブ・ディランがギター片手に演奏している。それを見つめる新しい人種、ボヘミアンたちを眺めながら、自分は、時代遅れなんだとその場から去っていくという。甘酸っぱいオチ。

小説「トレインスポッティング」もそうでした。ヒロインに溺れるジャンキーの登場人物たちが、エクスタシーという新しいドラッグを楽しむ若者に、俺たち時代遅れなんだと挫折させられる。「トレインスポッティング」の続編「ポルノ」はそんな時代遅れの主人公たちが、イギリスのバブルとグローバリゼーションの波に乗って復活した資本主義のドラッグ、コカイン中毒となって亡霊のように蘇ってくる。

ニール・キャサディがどう変わっていくかという点、初め新車のスポーツ・カーで現われるが、次に登場する時は中古のスポーツ・カーだった。ニールは頭金だけ払って、残りのローンを一切払ってはなく、レポマンに車をとりあげられていったんだろうな。

小説でのニールは落ちぶれたが、現実では、ジャック・ケルアックの方が時代の波に乗れずアル中になってぶっ壊れる。ニールは次に控えていたヒッピーの時代もLSDをやって、「カッコーの巣のうえで」を書いたケン・キージーのドライバーになって、死ぬまで走り続けた。本当は70年代、またスピードやり出してパンクになってシド・ヴィシャスとポゴを踊り、80年代はエクスタシーやってレイヴで「アシールド」と叫び、90年代はイギリスの労働党のスポークスマンとなって、ブレア首相からその功績を讃え

られバッキンガム宮殿のパーティーに呼ばれ、トイレでオアシスのノエル・ギャラガーとコカインをやる。

00年代はスーパードモデルのケイト・モスとザ・リバティーンズのビート・ドハーティとヒロインをやっていたら、一緒にやっていた奴がオーヴァードーズで死んでしまっ、起訴されそうになったので、ヨーロッパを逃げ出し、今はアメリカに戻って、ケタミンやって、バーニングマンでダブ・ステップやチル・ウェイブを聞きながらポカーンと砂漠のど真ん中でつっ立っていたら面白いんだけど、人生はカート・ボネガットやトマス・ピンチョンの小説のようににはならないので、ニール・キャサディはジャック・ケルアックと同じように肝臓をやられてアル中として、死んだんじゃないだろうか。

それともハンター・トンプソンのように自分で頭をぶち抜いて死んだんだっけ。だから僕のこの初めての小説のオチも、路頭に迷って僕は死ぬことになるんだろう。人生なんてそんなものだ。

だから、僕の話なんかどうでもよかったのだ。川崎さんの話だ。

川崎さんは当時、日本にフェスティバルという概念を持ってきたプロモート会社で働いていた。その会社は、今は日本にフェスティバルという大発明を持ってきてくれたとみんなから尊敬されているが——川崎さんがいた頃も、海外のようなスタンディング形式の誰もが警備員と揉めずに楽しく踊れるコンサートを日本でできるようにした偉大な会社なんだけど——その頃はそんなに尊敬されていなかった。あの当時はネットというものがなく、本当の声は広がらず、バカなマスコミだけが、自分たちの意見をばらまいていた。ネット以前とはそういう時代だった。そんなんだから川崎さんの会社は社員に給料が払えない時もあったりした。

川崎さんがどうやって生活をしていたかというのと、知り合いに売った会社のコンサートのチケット代を会社に納めることなく自分の生活費にあてていたのである。

傍で見ていると、時々、自分の給料よりも多くチケット代を貰っていないかという気もしていたのだが、川崎さんは「いいんだよ。いいんだよ」と言いながら、もっとお金のない僕にお酒を奢ったりしてくれていた。

こんな話によくあることなのかもしれないが、僕が川崎さんの言動に時々「あれっ」

と思い始めたのは「俺、電池とか買ったことないんだよね」など奇妙な事をたまにポツツと言ったりしたからだ。

今は電池なんかそんなに買わなくてもいいかもしれないけれど、あの頃はインタビュー取材に急遽電池が必要なんてことが多々あったのだ。変なこと言っているなと思っ  
ていたが僕は聞き流していた。

川崎さんで一番気になっていたのは、いつも最新の本を読んでいたことである。88年頃といえばトマス・ピンチョンの初めての短編集「スロー・ラーナー」が出たばかりであった。

たぶんバブルだったのだろう。ウイリアム・バロウズの作品などもどんどん新訳で発売されていた。僕はなんとかバロウズは買っていたのだが、トマス・ピンチョンまでは手が回らなく、これは短編だからと毎日日本屋にいったって、一編ずつ読んでいた。そんな苦労をしているのに、川崎さんは待ち合わせの場所で、いつも最新の小説を読みながら、能天気なアイスコーヒーなんかを飲んでいたりするのだ。

「お金もないはずなのに、なんで買えるの？」と聞くと、

「借りたんだよ」と言う。

「えっ、でもバロウズとかピンチョンの本は図書館にないでしょう。それにその本ビニールに被われてないじゃん。どこからだよ」

「うるさいな。本屋からだよ」

「えっ、それって、万引きじゃん。あの、前に『電池を買った事ない』って言ったのも万引き？ 30歳にもなって、何やってんだよ」

「万引きなんかしてないよ。借りてるだけだよ。読んだらちゃんと返しているよ。お礼にわざわざ押し花のしおりを入れて返しているんだぞ」

「押し花のしおりって、何だよ。新刊の本に押し花が入っていたら、気味悪がるよ」

「何言ってんだよ。喜ぶよ。こっちは苦勞して、四葉のクローバーを見つけて、押し花に入れてくれたぞ。幸福を呼ぶ本だぞ」

「幸福なんか呼ばねえよ。本は返せるとして、電池はどうしてるんですか。空の電池返してもらってもしかたがないでしょう」

「バカ野郎、単3を借りたら、単2にして返しているよ。倍返しだよ」

「そんなことされても、棚卸しの時に迷惑なだけだよ」

本や電池以外にもそういうバカなことをしているんじゃないかと不安になったので、「他に何も盗ってないだろうな」と聞くと、カップラーメンも借りたりしていると言う。

カップラーメンは当時流行り出した1・5倍増量とかにして返しているらしい。わざわざふたつ買ってきて、封を開け、乾燥ナルト等の薬味を足したり、麺を半分増やしたりして、返しているそうだ。

これは万引き以上に当時流行っていた、商品に毒を入れたりする犯罪者に間違われかねない、と心配になったので、「疑われたことはないのか」と聞くと、店員さんに何をしているのかと問われたので、「返しにきた」と答えると「やめてください」と言われて、押し問答になったそうだ。それでしかたなく、お店を出たのだが、歩いていると自分は一切悪いことをしていないという思いがふつふつと湧き上がってきて、また店に引き返し、その店員に文句をつけると、「頼むから帰ってくれ」と言われたと憤慨していた。

「いつもこんなことやっているわけじゃないからな、金がなくなっって、困った時だけだか

ら、みんなで助け合ってたんだ」と自信満々で言う。原始共産主義のような人である。世の中がすべてこんな感じだったら世界は丸く納まるのに。納まるわけないよ。

川崎さんとはそういう人である。そんな川崎さんとまたよく出会うようになった。あの原発事故のせいだ。川崎さんはプロモート会社に入る前は、日本の反核運動を音楽シーンから発信しようとしたザ・アトミック・カフェという団体にいたので、今回の事故に関して凄く憤りを感じているのである。

僕は反核運動には関わってこなかったが、CNDという反核団体をずっとサポートしていたグラストンベリー・フェスティバルやCNDのデモなどを取材してきていた。

そして、二人とも、いつか、こんな日がくるとは思っていたのだが、日本の技術は優秀、スリーマイルやチェルノブイリのようなことは起こらないんじゃないかと、25年という時間の中で、だんだんと目をそらしていたのだ。

メルトダウンするんじゃないかと日本、いや、世界中が静まりかえっていた日、僕たちは、なんでもっと本気になっていなかったんだろうと窓の外をずっと見つめていた。

二人ともそういう負い目があるのである。

だから、あの事故の後、4月10日の高円寺のデモに二人していこうと決めたのである。初めはデモだから、白いヘルメットを被って、手ぬぐいで口を覆って、角棒を持っていこう、と。まずは東急ハンズに集合して、そういう物を買ってからいこうかと思っただけで、この日は選挙にもいかないダメだし、46歳のデブとノッポのオッサンがそんな格好をしてもかっこ悪いかと思ったので、反核をちゃんと意志表明し新宿で一番美味しい生ビールを飲ませてくれるベルクでビールを一杯やってからいくかということになった。

ベルクは核とも戦っているが、自分たちが長年営業してきた店に「煙草やお酒は好ましくないから、立ち退いてくれないか」という理不尽な要求を突きつけてくる連中とも戦っている。

二人で酔っぱらいながら、煙草の規制が完了すれば、次はお酒の規制が始まるぞ、それにはすぐその歌舞伎町を寂れさせた風営法との戦いになるだろう。きっとこの反原発の戦いは、そういうことまで巻き込んでいくぞ、と話をした。

「オン・ザ・ロード」でのパロウズで言うなら、

「なあ、サル、最近の棚はちょっとしたものを置いていただけで六ヶ月もすると壊れるか崩れるかするって、知ってるか？ 家だっておなじだ、服もおなじだ。ろくでなしどもはな、プラスチックを発明したんだから、ほんとうはそれで永久にもつ家を作ることできる。タイヤだってそうさ。路上ですぐ熱くなって破裂するような欠陥だらけのゴム・タイヤを使っているから、アメリカ人は毎年百万人単位で死んでいる。しかし、ぜったい破裂しないタイヤは作れるんだ」

「服もおなじさ。やつらは永久にもつ服を作れる。だがあえて安物を作るんだ。そうすりゃ、みんな、しかたなくせつせ働いてタイムカードを押しておもしろくもない組合を作ってつまんなそうに騒ぎまわってくれるからさ。そのあいだにワシントンやモスクワでは大略奪が進むって勘定よ」(注)

ツッコミどころ満載だけど、ヘロインでぶっ飛んだオカマだけあって、真理をついているよ。

二人していい気持ちになって、高円寺に向かうとそこはもうけっこうな人ばかりで嬉しくなる。長い事会ってなかった人たちに会った。このデモで「原発いらない」とトースティングするランキン・タクシーさんとは、グラストンベリー・フェスティバルにランキンさんが感動して、一級建築士の仕事を辞めて、レゲエで食っていくと宣言したのを聞いた時以来だった。ここ最近の友達にもたくさん会った。その一人が、スヌーザーという雑誌で働いていたダイジロウである。

ダイジロウは僕に「久保さんもやっぱデモにきたんすか」と生意気な事を言うので、ここは一発ビビらしてやろうと、「ダイジロウ、お前免許証とか身元のわかるもの持ってきてないだろうな。捕まっても、48時間黙秘だからな」と言う、「デモって、やっぱ捕まるんすか!」と泣きそうな顔をするので、「大丈夫だよ。公務執行妨害で逮捕するぞ、って言われるまでは何をしても逮捕なんかされないよ。それにこれはイラク戦争反対とか、他の国の内政干渉のデモじゃないんだから、公安もおとなしいと思うよ」

その通り、この高円寺のデモは本当に何ひとつ問題のない素晴らしいものだった。渋谷とか新宿みたいなのじゃない、自分たちが普段住んでいるような町を歩くデモはとっても気持ちがいいもんだ。誰一人逮捕者も出なかったんじゃないだろうか。